『〈中〉のロゴス――東アジアの目から』コメント集

① TY（10.8）

このたびは、ご著書『〈中〉のロゴス――東アジアの目から』ならびに論文「対話の哲学に向けて」をご恵贈いただき、誠にありがとうございました。印刷事情により大変ご苦労されたとのことですが、無事にお手元に届き、こうして貴重なご著書を手に取ることができましたことを心より嬉しく思っております。

本を開く前にまず、鮮やかな萌黄色の表紙と、隣り合わせに反対に向き合う半円のデザインに強く目を奪われました。

先に塾での振り返りメールを通じてご提示いただいた全体の総括と骨子を拝読し、私なりに本書の構想と深い企図について考えを巡らせておりました。西洋形而上学が「善のイデア」のようなピラミッドの頂点（最高峰）を目指す「頂極主義」をとってきたのに対し、中国の伝統においても「中庸」を最上位の徳や絶対的な宇宙原理として高めるという、いわばもう一つのピラミッド（形而上学）が形成されてきたと理解いたしました。

先生が本書で提示されている「非形而上学」としての〈中〉のロゴスは、こうした「上へ上へと登り詰めるピラミッド型の構造」そのものから脱却する試みなのだと強く感じます。図で表せば、頂点を目指すあまり巨大化し、鋭く尖っていく「三角形」のイメージです。頂点を目指すのではなく、円のまんなか――「中央・定位置」にすっと身を置くこと（初発性）。そこから発せられる一手や実践がその場にぴたりと調和し（的中性）、その中心から波紋が広がるように、先達や対話を通じて人と人との〈あいだ〉へと開かれていく（中間性・媒介性）。

実は私自身、かつてなぎなた部に所属していた経験がございます。 そのため、表紙にある「二つの異なる半円が接しながら合わさっている図形」のイメージや「武道・道の文化」のお話に接した際、自分の中心軸（定位置）をブレさせずに相手と向き合う構え、一瞬の間合いのなかで「見事一本！」と決まる「節に中る」手応え、そして先達の型を通じて技と心が手渡されていく感覚が、非常に生々しく身体感覚として重なりました。

頂点を目指して尖っていくピラミッドではなく、自身の定位置から立ち上がる「同心円状に広がっていく生の場」を取り戻すこと――合わされば一つの丸（〇）となって皆を包み込み、広がっていくこの円のあり方こそが、先生の仰る「〈中〉のロゴス」であり、現代世界に対する強力な「橋頭保（足がかり）」なのだと受け止めております。

これから本文をゆっくりと拝読させていただき、さらに深く学ばせていただくのを大変楽しみにしております。増刷に向けた「1 人ずつへの宣伝」につきましても、本書の持つこの素晴らしい視点を必要としている知人・友人に、しっかりと熱量を持って届けてまいります。

② CI（10.9）

昨晩は遅くまでありがとうございました。
先生が『〈あいだ〉をひらく』をどう乗り越え、『〈中〉のロゴス』に至ったのかを知ることができ、ますます新著を読むのが楽しみになりました。

二者択一で敵か味方かに分けてしまう「分断」を乗り越えるには、〈あいだ〉をひらくことが必要。しかし、「中間」という言葉があるように「中」と「間」は異なる。「間」はそもそも二者が分かれているという前提の発想だ。しかし「中」は違う。まだ何者にもならぬ段階から何かが生まれてくること、そして、こうなるとしか思えないかたちにおさまること。西欧の哲学が扱いきれなかった東洋のロゴス＝論理だけではない意味が、「中」であるという新たな到達点に触れてしびれました。

この本は、現代の時代状況において誰もが一読すべき書だと思います。
どんどん宣伝したいと思います。

③ MF（10.11）
このたびは御新著『〈中〉のロゴス』をお送り下さり、ありがとうございます。
単に西洋の哲学者のあとを追うのではなく、どこまでも自分自身の思索を展開していこうとする貴兄の哲学との向きあい方、背筋が伸びる思いがいたします。少しでもそうありたいという気持ちをあらためてもちました。
非形而上学としての「〈道〉の文化」のなかに風土学の実践論の可能性を探ろうという貴兄の今回の試み、とても魅力的に感じました。また説得力を感じました。新しい哲学がここに切りひらかれつつあるという思いを強くもちました。
まだこれから「対話の哲学」に向けて歩みを進められるとのこと、そのご成果を期待しています。

④ CM（10.21）
木岡伸夫先生の新刊を読み始めました。
まだ読破には至っていませんが、書き出しに出会っただけで、もう、ワクワクしています！
💖
「邂逅不在の現実を告発しながら、邂逅の実現に向けた方法論を含まない」
この「邂逅」と言うことばに、自分の中にありながら、まだ自分の言葉に できていなかった問いを考えるヒントがあるように感じました。
先生の講義で学んだ「個人と地球との間」「関係性から、あいだへ」。
そして、M さんが話してくれた、ミクロとメゾの「あいだ」。
今、これまでの経験と、これからやりたいことが、少しずつつながり始めています。
私が取り組みたいのは、当事者とさまざまな業界の専門職が良くは知らないコトを一緒に

体験し、それぞれの発見や違和感を持ち寄れる場づくりです。
知識を学ぶだけでも、誰かの困りごとを聞くだけでもなく、一緒に体験するからこそ見えてくるものがある。
その気づきを新しい関係や仕組みにつなぎ、次の人へ手渡していきたいのです。
私は、そんな営みを「コトづくり」と呼んでいます。
そして、その思いを託している言葉が「戻り酒」です。
一緒につくった仲間が、全員同じ舟に乗れなくても、一緒に積み重ねた時間やつながりまで終わりにしない。
由来や史実も、これから確かめながら育てていきたい考え方です。
モノづくりやヒトづくりを大切にしながら、その先に、人と人が出会い、互いの知らない世界を知り、何かが生まれる「コト」をつくる。
哲学と現場を行き来しながら、私なりに考え、実践していきたいと思っています。
出会うことから、何かが始まる。 そして、出会っただけで終わらせない。
先生の新刊との出会いが、これまでの経験に新しい問いを生んでくれています。
まだ入口に立ったばかりですが、これから読み進めるのが楽しみです！💔🌈
木岡先生、ありがとうございます。

⑤ TT（10.23）
「＜中＞のロゴス」を読んでの感想
先生のご著者を頂戴し有難うございました。全部は読ませていただきましたが、その一部についての感想を以下のとおり記入させていただきました。

１，＜中＞と＜あいだ＞38～39Ｐ
　この 2 つの違いについて論じられていますが、私は、従来から「あいだ」には幅があり、「中」はその中の一点で、幅の中を行き来するもので、明確な基準が与えられた場合のみ、その場で移動を止めるものだと理解していました。ところが、ご著書の中の議論を読んでいる間に、先生の言われるとおり、「あいだ」は、インドのナーガルジュナのいう仏教的「中論」の中の「無」を基本にし、一方の「中」は古代中国の孔子の流れを汲む「中庸」を基本にした思考ではないかと理解しています。すなわち、前者の「無」の思想は、ただ「無い」ということではなく、すべてのものは繋がり循環していて本質的な実態が無いということですから、すべてのものは無限の「あいだ」を廻り回っているだけということになります。その結果、「Ａでもなく、Ａでないこともない。」ということになったのではないかと思います。他方、後者の「中庸」は「中論」とは異なり、「偏らなく、また、どのような時代にもまたどのような場合にも、ぴったりと合う。」という考えですから、「あいだという幅の中でその場その場で絶対的な最適ポイント」を示す思想を示しているのだと思います。そのため、そのポイントがどこにあるか決めるのは、皇帝以外には存在しないことになり、「中庸」の

思想は、漢以降の歴代帝国において国の統治に利用された面もあると思います。

２．＜形＞から＜かたち＞ 154～155Ｐ

ここでは、＜形＞と＜型＞という漢字での文字上の「読み方」と「意味の違い」について議論されているわけですが、私は、これを歴史的な視点から考えてみました。はじめに（１）「形」という漢字について白川静氏の辞典で調べたところ、この文字の編は本来「井」の形をした木の枠を表していて、その中に粘土を入れて必要なかたちを掘って固めたあと、溶かした金属を流し込んで鋳物の道具を造ったことを表しているという説です。旁の方はできた鋳物に色を塗るための刷毛を表しているということでした。次に（２）ですが、（井）があり、（土）があり、（リ）が追加されています。この「リ」は金属を溶かすためのミゾを整えるための刃物だそうです。ですから、全体としては、「形」と同じことを表しています。また、（３）両者の意味については、木岡先生の言われているとおり、中国においての漢字の意味は両者全く同じだそうです。最後に、（５）では、日本では何故中国と異なる使い方がされてきたのかということです。三省堂の大辞林では、「形」は外見に現れた「かたち」とする一方、「型」は一定のタイプ、相対的な特性によって区分する場合に使われるとしています。例えば、新しい型の車、血液のＡ型、Ｂ型、同種類の物をいくつも作る場合の鋳型，ひな型、髪型など。また、一定の体勢や動作を表す柔道の型等です。これは、あくまでも仮説ですが、同じ意味の２つの漢字が日本に入ってきたとき、日本人が字体を見たときの感性に従って使い分けをしたのが定着したのではないかと考えてもいいのではないかと思います。